綿としも呼ならへるは、はやくより其名人の口實になりて、草綿にもやがて移して、稱來れりし也、名物のうへには常に此類おほし五雜俎をみれば、棉花雖有草木二種、總謂之木綿花、ともあれば、彼邦の語も同じきと見えたり、さて眞の木綿も稀にはありとぞ、されど一二歳も經ぬれば、悉く消失ぬといへり、安齋隨筆に、木綿は近年渡り來りて、所々に種る由傳へ聞けりと有り、諸國の人によく訪きゝて尋ねしらまほしき事なり、

さて楢村氏が市郎右衛門長高といへり、天文永祿の頃の人なり、室町殿日記には、天文九年の條に、中間衆木綿三十五匹買取といふ事みえたり、永祿年中の事を書たるに、木綿一反代二百文ともあり、この文によれば、天文の頃既に渡り來れりとも覺ゆ、これも猶草綿なるべし、それより泝て、玄惠法印建武頃の人の庭訓往來十月の條に、木綿一宛配とも見えしは、何れを指るにか定がたけれど、かの衣笠內府の歌にあはせて考れば、此等も木綿とはおもはれず、かゝれば草棉のこゝに傳はりしも、實は鎌倉の代などに、五山の緇徒の、宋元より隨來れるにもやあらむ、茶を榮西の傳へたる類とすべし

書禹貢に、島夷卉服厥篚織貝と、蔡沈が注に、木綿の事なりといひ、大學衍義補にも、此說によりて、島夷時或以充貢、中國未有也、中國有之、其在宋元之世乎といへれど、虞夏の世の卉服を木綿とは定がたし、枲麻葛の類なるべければ、これも五雜俎によりて、梁武帝の木綿皂帳など物にみえたれば、南北朝に權輿して、宋元の頃より盛なりと知べし、

〔大和本草六民用草〕木棉　棉布ハ異國ヨリ近古ワタル、其種子ハ文祿年中ニ來ル、朝鮮ニハ洪武二十二年、大元ヨリ種來ル由、東國通鑑ニイヘリ、木棉ナキ時ハ、貧士賤民皆麻布ヲカサネテ寒ヲフセグ、近世木棉ノ種ワタリテ、南北トモニ土地ニ宜シク、四民寒苦ヲマヌカル、誠ニ萬世ノ利、群國ノ寶也、明王ハ金玉ヲイヤシミテ五穀ヲ寶トスト古人イヘリ、木棉モ五穀ニ同ジク寶トスベシ、金玉ニマサレリ、中華ニモ宋ノ末始テ種ヲ南蠻ヨリ傳ヘタリ、兵瓊山李時珍諸說皆然リ、然ルニ